

## 近世日本における武士道と食事作法

お茶の水女子大学 院生 小林加代子

本報告は、近世の武士道書に見られる食事作法の記述に焦点をあて、そこにあらわされる武士のあり方について検討するものである。

江戸時代後期の兵法家である大道寺友山は、初心の武士のための心得を説いた『武道初心集』で、武士の行住坐臥について次のように述べている。「武士たらん者は、行住坐臥二六時中、勝負の気を忘れず心におくを以て肝要とは仕るにて候」<sup>1</sup>、つまり、武士の日常の立ち居振る舞いはすべて「勝負の気」を意識して行なわれるものと考えられていた。彼らの作法は、日常的な身のこなし、言葉遣い、身だしなみにいたるまで、みな戦闘時におけるあり方が基準とされるのである。これは、戦国乱世の戦闘者の思想を指す「武士道」においても、また太平の世における新しい形の武士の思想を指す儒教的な「士道」においても基本的に変わらないものである<sup>2</sup>。

こういった日常的なマナーの中でも、食事作法は大きな位置を占めていたと考えられ、関連する記述が多数見られる。「武士道」論者として知られる山本常朝の『葉隠』では、特に酒席について詳しく述べられている。たとえば、「酒座にては就中気をぬかさず、不図、事出来ても間に合様に了簡有るべきこと也」<sup>3</sup>とし、思いもよらぬ出来事が発生してもすぐ対処できるよう心がけなければならないと論じている。『葉隠』では酒席を「公界もの」、つまり公の場と捉えており、そのため武士としてどのようなときでも奉公の体勢を崩さないという意識を前提としているのである。これに加えて、「酒といふ物は、打上り奇麗にしてこそ、酒にてある也」<sup>4</sup>とも述べる。そして、酒席には「人の心入」までもがあらわれるものであるから、ただ飲むだけではなく仕舞いを良くして、人間がいやしく見えぬよう気を配るべきだと戒めている。

また、いわゆる「士道」論者の代表と目される山鹿素行は『士道』（『山鹿語類』巻二十一）において、武士の日常における行動を、飲食をはじめ視聴・言語・容貌・衣服・居宅・器物と細目に分け、すべてについて「礼用」にしたがって解説する<sup>5</sup>。そして、そこに武士としての「威儀」を見出している。「威儀」とは「その容貌より言語に至るまで、かるがるしからず、甚だおごそかにして、人にて畏るべきの形也」<sup>6</sup>というものであり、その根源こ

<sup>1</sup> 古川哲史校訂『武道初心集』、岩波文庫、1943 年、32 頁

<sup>2</sup> 菅野覚明『武士道の逆襲』、講談社現代新書、2004 年、202 頁

<sup>3</sup> 『日本思想大系 26 葉隠』、岩波書店、1974 年、242 - 243 頁

<sup>4</sup> 前掲『葉隠』、227 頁

<sup>5</sup> 『日本思想大系 32 山鹿素行』、岩波書店、1970 年、59 - 147 頁

<sup>6</sup> 前掲『山鹿素行』、61 頁

そ武士の本質たる「勝負の気」である<sup>7</sup>。そして、身体・精神を万全に保つべく節度を守った飲食をするという「飲食之用」<sup>8</sup>はもちろんのこと、「飲食するの礼」<sup>9</sup>として、その立ち居振る舞いとしての美しさにも言及する。

このように、武士の日常生活での作法には、彼らの生き方における戦闘者としての本質が色濃くあらわされていたことが分かるのであり、特に食事作法には彼らの美学までもが明確なる表象として見出されるのである。

---

<sup>7</sup> 菅野前掲書、203 頁

<sup>8</sup> 前掲『山鹿素行』、91－96 頁

<sup>9</sup> 前掲『山鹿素行』、97－100 頁